

クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の展開

—— 統治の仲介者としてのマナプの位置づけを中心に ——

秋 山 徹

はじめに

中央アジア近代史をめぐる昨今の研究動向において、ロシア帝国と中央アジア社会の関係を過度に対立的なものとして捉える従来の見方は克服されつつある。その背景には、公文書館史料を駆使し、ロシア統治の実相に肉薄することによって、その多面性が浮き彫りになってきたという事情がある⁽¹⁾。この中で研究の対象として光が当てられるようになったのは、ロシア帝国と中央アジア社会が相互に交渉をはかる上での結節点の役割を果たした、現地社会の様々なアクターである。それは概して二つに分けることができる。ひとつは、総督府制度をはじめとするロシア帝国の統治機構や制度に着目する研究であり⁽²⁾、もうひとつは、中央アジア現地社会のエリート層をロシア統治の仲介者という側面から考察する研究である。後者においては、ロシア帝国史研究と民族史研究が相互に乗り入れるかたちで、在地の「伝統」的な権力がロシア支配の下で再編される様相が明らかにされてきた。その代表的な業績とし

-
- 1 研究の到達点を示す代表的な業績として、以下を挙げることができる。Daniel R. Brower and Edward J. Lazzerini, eds., *Russia's Orient: Imperial Borderlands and Peoples, 1700–1917* (Bloomington: Indiana University Press, 1997); Virginia Martin, *Law and Custom in the Steppe: The Kazakhs of the Middle Horde and Russian Colonialism in the Nineteenth Century* (Richmond, Surrey: Curzon, 2001); Alexander Morrison, *Russian Rule in Samarkand: 1868–1910: A Comparison with British India* (Oxford: Oxford University Press, 2008); Центральная Азия в составе Российской империи / Под ред. С.Н. Абашина, Д.Ю. Арапова, Н.Е. Бекмахановой. М., 2008; 宇山智彦『『個別主義の帝国』ロシアの中央アジア政策：正教化と兵役の問題を中心に』『スラヴ研究』53号、2006年、27–59頁。
 - 2 Маузмато К. Генерал-губернаторства в Российской империи: От этнического к пространственному подходу // Новая имперская история постсоветского пространства. Казань, 2004. С. 427–458; Ремнев А.В. Степное генерал-губернаторство в имперской географии власти // Азиатская Россия: сборник научных статей. Омск, 2005. С. 163–222; 長縄宣博「帝政ロシア末期のワクフ：ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアを中心に」『イスラム世界』73号、2009年、1–27頁。また、宇山智彦はステップ総督府の官報『ステップ地方新聞』をカザフ知識人とロシア人行政官の「戦略的協働」による「想像の共同体」の生成の場として捉えている。Uyama Tomohiko, “A Strategic Alliance between Kazakh Intellectuals and Russian Administrators: Imagined Communities in Dala Walayatīnīng Gazetī (1888–1902),” in Hayashi Tadayuki, ed., *The Construction and Deconstruction of National Histories in Slavic Eurasia* (Sapporo: Slavic Research Center, 2003). pp. 237–259.

ては、カザフのスルタンたちの土地戦略を論ずる米国のヴァージニア・マーティンの研究⁽³⁾や、ロシア統治下のカザフ社会におけるカザフ人官吏の形成過程に着目するカザフスタンのグルミラ・スルタンガリエヴァの研究⁽⁴⁾が挙げられよう。

このような近年の研究動向に鑑み、筆者はカザフやウズベクなどに比べて研究が希薄なクルグズ（キルギス）⁽⁵⁾に着目し、それがロシア帝国の支配に包摂されてゆく過程を、「マナプ」⁽⁶⁾という称号を冠して呼ばれた部族指導者に焦点を当てて考察してきた。19世紀中葉にロシア帝国が中央アジアを征服・併合し、統治機構を創設する段階におけるマナプの位置づけを考察した前稿⁽⁷⁾において、帝国の軍事膨張と行政機構の確立が同時並行する状況の下、マナプが統治の仲介者として登用され、取捨選択をとめないつつも、統治制度の末端に組み込まれていく様相を明らかにした。

前稿の作業を踏まえ、本稿は、クルグズがトルキスタン総督府の創設によって帝政ロシアの直轄統治下に入る1867年から、帝政が崩壊する1917年以前までの約半世紀におけるマナプの位置づけについて考察することを課題とする。1867年以降、住民から選挙によって選出される郷長が現地民統治のための公式の仲介者として設置されたことにより、マナプが公権力として認められなくなったことはよく知られている。それにもかかわらず、ロシア統治期からソ連時代草創期の1930年代初頭に至るまで、マナプがクルグズ社会の中で一定の存在感を保持し続けたことを示す同時代人の指摘や証言は枚挙にいとまがない。たとえば、民族学者М.Ф. Гавриロフは論文集『中央アジアにおける現代のアウル』に発表した論文「マナプ」の中で、「1867年の統治規定はマナプの権勢と権力に大きな打撃を与えた。しかしながら実質上マナプたちは新しい条件に適応していった。[...] 選挙制度の導入と、これに関連する様々な策略を実施する可能性が拡大したことによって、マナプ制度 *манапство* は強固なものとなり、一定の一枚岩としての形をとるようになった」と指摘する⁽⁸⁾。また、20

3 Virginia Martin, “Kazakh Chinggisids, Land and Political Power in the Nineteenth Century: A Case Study of Syrymbet,” *Central Asian Survey* 29, no. 1 (2010), pp. 79–102.

4 Султангалиева Г. Казахское чиновничество Оренбургского ведомства: формирование и направление деятельности (XIX) // *Acta Slavica Iaponica* 27 (2009), pp. 77–101.

5 ロシア帝政時代およびソ連時代初期の1925年まで、公的文書等においてクルグズはカザフとともに「キルギズ киргиз」と総称された。場合によって、クルグズは「カラ・キルギズ кара-киргиз」、「ディコカメンタイ・キルギズ」、カザフは「キルギズ・カイサク киргиз-кайсақ」として区別されることもあった。本稿では史料引用に際しては原文表記にしたがうが、地の文においては「クルグズ」、「カザフ」と区別して表記する。

6 クルグズ民族史研究によれば、マナプという称号の由来については未だに不明な点が多いものの、それは17世紀にクルグズのサルバグシ族を率いた指導者の個人名に由来し、19世紀初頭には周辺のクルグズ諸部族（ソルト、サヤク、ブグ）の指導者の称号として普及したものと考えられている。Абрамзон С.М. Киргизы и их этногенетические и историко-культурные связи. Бишкек, 1990 (初版 1971 年). С. 168–169. 近年の研究としては以下を参照。Асанов Т. Шабдан баатыр жана кыргыздардагы башкаруу бийлигинин традициясы // Кыргызстан: история и современность. Бишкек, 2006. С. 158–167.

7 秋山徹「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立：部族指導者『マナプ』の動向を手がかりとして」『史学雑誌』119編8号、2010年、1–35頁。

8 Гаврилов М.Ф. Манап // Современный аул Средней Азии (социально-экономический очерк) / Под ред. Б.Б. Карипа, Н.Е. Суелова. Ташкент, 1927. С. 210.

世紀初頭にクルグズ社会を間近で観察し、タタール語雑誌『シューラー』に「クルグズについて」と題する論説を発表した Sh. V. なる人物が、「クルグズの民の指導者はマナブ（アク・スイエク [白い骨]）と言う。[...] マナブの地位 *manābliq* は世代から世代へと継承されている」と指摘していることから⁹⁾、当時マナブがクルグズ社会の支配階層として実質的に定着していたことは確かであると思われる。また、筆者はかつて、20 世紀初頭に開催されたマナブの葬送儀式について考察したが、そこからは儀式の開催に向けてマナブが民を強力に動員する情景が露わになったのであった¹⁰⁾。

それでは、マナブがロシア統治期をととして一定の力を保持することを可能にした条件は何だったのか。第一に考えられるのは、マナブたち自身による主体的な活動である。筆者のこれまでの研究をととして、彼らが、系譜書の刊行をはじめとする歴史の叙述や、メッカ巡礼やモスク建設といったイスラーム的な行為の実践によってクルグズ社会における自らの存在感を高めようとしていたことが明らかになっている。この問題は近代におけるクルグズ社会の動向を明らかにする上で極めて重要であるが、その実相の解明は紙幅の都合上別稿に譲らねばならない¹¹⁾。第二に考えられるのは、クルグズ社会の持つ内在的な要因というよりは、ロシア統治それ自体である。この点で参考になるのが、ロシア帝国による北コーカサスの山岳民統治について考察したプロヴェルトの研究¹²⁾ である。彼によれば、同地域において 1850 年代後半から導入されていた「軍民統治 *военно-народное управление*」と称される統治形態は、当時ロシア内地で進行していた大改革の理念に沿った既存の社会階層の平等化という理念をもっていたが、ロシア行政官や軍人は人材不足のために現地社会と正面から交渉することができなかった¹³⁾。このため結局は現地の仲介者に頼らざるをえず、既存の伝統的な支配層を掘り崩せなかったと指摘する。事実、このようなロシア帝国の統治能力の低さは中央アジア統治に関しても指摘されている。たとえば、宇山智彦によれば、「ロシア軍人や行政官たちの根底には中央アジア諸民族への猜疑心があり、そのため彼らは無理な統合・ロシア化を進めるよりは、むしろその時点での消極的な安定を保とうとしていた」¹⁴⁾。また、「支配が末端にまでいき届かないという意味で、日常レベルでは原住民がある程度

9 Sh. V., “Qirgizlar tūrusında,” *Shūrā* 4 (1911), p. 102. また、同時代にセミレチエのクルグズ社会に滞在して間近で観察したタタール人サブル・ガブドゥルマンも、1913 年に数回にわたって『シューラー』誌に発表した滞在記「天山山脈の暗い窪地から」の中で、「マナブはクルグズの全ての部族にいて、一人 [のマナブ] が亡くなると、次の [マナブ] が現れる」と記している。Şābir ‘Abdālmanof, “Tyānshān fāūning tīren chūqurlarından,” *Shūrā* 2 (1913), p. 62.

10 秋山徹「20 世紀初頭のクルグズ部族首領権力に関する一考察：シャブダン・ジャンタイの葬送儀式の分析をてがかりとして」『内陸アジア史研究』24 号、2009 年、89 頁。

11 この問題については稿を改めて論ずるが、当面以下を参照。秋山徹「20 世紀初頭におけるクルグズの歴史叙述：オスマン・アリー・スドゥコフ『幸あるクルグズの歴史』を中心に」『日本中央アジア学会報』6 号、2010 年、12–14 頁。

12 Timothy K. Blauvelt, “Military-Civil Administration and Islam in the North Caucasus, 1858–83,” *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 11, no. 2 (2010), pp. 221–255.

13 軍民統治のロシア帝国全体の中での位置づけに関しては以下を参照。Мацузато. Генерал-губернаторства в Российской империи (前注 2 参照). С. 433.

14 宇山「『個別主義の帝国』ロシアの中央アジア政策」(前注 1 参照) 54 頁。

自由にふるまえる一方で、何か不穏な情勢になった場合には、行政当局が原住民に過剰な警戒感を持ち、粗暴な取り締まりや懲罰を行った。ロシア支配の暴力性と寛容さは、結局どちらも統治能力の低さに由来していた⁽¹⁵⁾。このような統治能力の低さが、クルグズ社会のマナブを含む中央アジア現地社会内部の権力関係に少なからぬ影響を及ぼしていたであろうことは想像に難くない。

しかし、これまでロシア帝国のクルグズ統治に関する研究は、ロシア人移民政策や1916年叛乱を焦点に多くの研究が蓄積されてきた反面⁽¹⁶⁾、約半世紀に及ぶその統治の実相が解明されることはなく、統治制度の概括の域をでなかった⁽¹⁷⁾。この中で、マナブは、階級闘争の観点から「封建社会上層の搾取者」として糾弾するにせよ⁽¹⁸⁾、あるいは「民族の英雄」として顕彰するにせよ⁽¹⁹⁾、「伝統社会の有力者層」として位置づけられてきた。近年、欧米では民族学や社会人類学の立場からクルグズ近代史を扱う研究が出されつつあるものの、従来の認識枠組みを克服することに成功しているとは言い難い⁽²⁰⁾。

以上のような問題意識と研究動向をふまえつつ、本稿はセミレチエ州南部に位置したトクマク郡（1888年にピシュペク郡に改称）とブルジェヴァリスク郡の一部に焦点を当てて、同地域においてロシア軍人や行政官たちが行ったクルグズ統治の実態を明らかにし、その中から浮かびあがってくるマナブの位置づけを三つの段階に分けて論じたい。まず第1章では、ロシア統治草創期から中央アジア征服が完了する1880年代までを扱う。続く第2章では、1880年代から1905年前後の状況を取りあげ、ロシア権力がクルグズ社会への本格的な浸透を開始する時代について検討する。第3章では、1905年以降の状況に目を向け、ロシア人

15 宇山智彦「ロシア帝国の支配：『諸民族の牢獄』か？」宇山智彦編『中央アジアを知るための60章』明石書店、2003年、58頁。

16 代表的な研究として以下を参照。西山克典『ロシア革命と東方辺境地域：「帝国」秩序からの自立を求めて』北海道大学図書刊行会、2002年。

17 История Киргизской ССР: С древнейших времен до наших дней. В 5-ти томах. Т. 2. Фрунзе, 1986; Сапаралиев Д.Б. Система управления кыргызов в составе российской империи (1855–1917 гг.) // Коомдук илимдер журналы (Кыргыз-Түрк «Манас» университети). 2004. № 12. С. 47–59. たとえば、ロシアの著名な東洋学者 В.В. Бартольд は1927年に刊行された、クルグズの近代史を扱う概説書『キルギズ：歴史的概観』において、1867年以降の状況に触れることはなかった。Бартольд В.В. Киргизы (исторический очерк). Фрунзе, 1927.

18 Усенбаев К. Общественно-экономические отношения кыргызов (вторая половина XIX–начало XX вв.). Фрунзе, 1980.

19 Исраилова-Харьехузен Ч.Р. Традиционное общество кыргызов в период русской колонизации во второй половине XIX – начале XX в. и система их родства. Бишкек, 1999; Өмүрбеков Т.Н. Улуу инсандардын кыргызстандын тарыхындагы ролу жана орду (XIX кылымдын ортосу–XX кылымдын башы). Бишкек, 2003.

20 Daniel Prior, “Heroes, Chiefs, and the Roots of Kirghiz Nationalism,” in *Studies in Ethnicity and Nationalism* 6, no. 2 (2006), pp. 71–88; David Sneath, *The Headless State: Aristocratic Orders, Kinship Society, & Misrepresentations of Nomadic Inner Asia* (New York: Columbia University Press, 2007), pp. 84–91; P. G. Geiss, *Pre-Tsarist and Tsarist Central Asia: Communal Commitment and Political Order in Change* (London, New York: Routledge Curzon, 2003); Svetlana Jacquesson, “Reforming Pastoral Land Use in Kyrgyzstan: From Clan and Custom to Self-government and Tradition,” *Central Asian Survey* 29, no. 1 (2010), pp. 103–118.

移民政策の本格的な展開によって、クルグズ社会がロシア人たちとその統治に、より直接的に対峙する状況の下、どのような変化が生じたのかということについて考察する。

本稿で取り扱う範囲は極めて限られたものではあるが、当時の中央アジアのクルグズの主たる居住地であったセミレチエ州という地域に着目することで、クルグズ社会に密着したロシア統治の実相を活写することができるものとする。さらには、ロシア統治下にあったこの一地域を精緻に描写することで、ロシア帝国の異民族統治の特質を解明する上での新たな参照点を提供することが可能になるだろう。



典拠：小松久男他編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年、340頁の地図をもとに筆者作成。

史料としては、中央アジア諸国およびロシアの公文書館が所蔵する帝政ロシア植民地当局の行政文書や、民間所蔵文書を含む未刊行史料を中心に用いる。同時に、これらを補足するものとして、官報やロシア語の新聞・雑誌、そして20世紀初頭に刊行されたアラビア文字チュルク語表記の雑誌に掲載されたクルグズ関連の論説も参照する。なお、史料の引用に際しての〔〕は筆者による補足を、〔…〕は中略を意味する。

1. ロシア統治初期におけるマナプの位置づけ

(1) 「部族指導者」から「貴族」へ

まず、本章では、併合前後から直轄統治草創期までの間に、ロシア人たちがマナプをどのような存在として捉えていったのかということについて論じる。

ロシア帝国の、中でも辺境統治に関与する軍人・官僚たちのクルグズ社会に対する認識は、

彼らがそれ以前から有していたカザフ社会に対する認識を基準にして形成された。カザフはすでに 15 世紀末の段階で遊牧政権カザフ・ハン国を形成しており、彼らの社会は「白い骨」(アク・スイェク)⁽²¹⁾と呼ばれる、チンギス・カンの男系子孫である君主ハンとその男系同族スルタンからなる貴族層によって統べられていた。比較的早期よりカザフとの接触をもっていたロシア軍人や官僚たちは、カザフのこのような社会構造についても熟知していた。

さて、ジュンガル政権が崩壊した 18 世紀中葉以降、ロシア帝国がカザフ草原への進出を活発化させる過程で、クルグズはカザフ草原の辺境に居住する民族として認識された。当時「キルギズ(カイサク) киргиз(кайсаk)」と呼ばれていたカザフに対し、クルグズは「野蛮なキルギズ」、あるいは「山並みの向こうのキルギズ」と呼ばれ、区別された⁽²²⁾。カザフを基準とするロシア人たちのこのようなクルグズ認識は、民族名称のみならず、社会構造の認識にもおよんだ。すなわちクルグズ社会は、前述の「白い骨」、つまり貴族層の欠如こそが社会構造上の特質とみなされたのである。このことは、たとえば、1814 年にシベリア要塞線軍団司令官 Г.Е. グラゼナブが時の外相 Н.П. ルミャンツェフに宛てた上申書の中で、「…野蛮なキルギズ [=クルグズ] はその生活様式および慣習において大、中、小オルダのキルギズ [=カザフ] とは全く異なっている。彼らにはスルタンや首領は存在せず、自らのビー[指導者]によって治められかつ裁かれる」と述べていることから窺えよう⁽²³⁾。

それでは、19 世紀中期以降に、クルグズ社会において首領の称号として顕在化するようになったマナブはロシア人たちにどのように認識されていたのであろうか。このことについて、同時代にクルグズ社会を観察したロシア軍人や官僚、学者たちは以下のような証言を残している。たとえば、ロシア帝国の軍人であったカザフ人ショカン・ワリハノフは、1850 年代中頃にクルグズの許を訪れ、膨大な調査記録を残した。その中で彼は、クルグズ社会が「支配者(マナブ)と平民(カラ・ブカラ)」からなりたっていること、また両者の関係を専制君主と奴隷に喩えて、貴賤の別が明瞭であることを示す一方で、マナブがチンギス・ハンの末裔、つまり「白い骨」の血統には属さないことを強調した⁽²⁴⁾。また、同じ時期に天山山脈の調査に従事した地理学者 П.П. セミョーノフも、1865 年に刊行された『ロシア帝国地

21 「白い骨」は、実際にはチンギス裔に限定されるものではなく、ホジャ(預言者ムハンマドの聖裔やスーフィズムの導師)に対しても用いられることがあった。

22 たとえば、著名なロシア人官僚であった А.Г. アンドレエフは、1785 年に著した『キルギズ・カイサク中オルダの描写』の中でクルグズを「野蛮で、あるいは山並みの向こうにいる黒キルギズ дикие, черные или закаменные киргисцы」と記している。Андреев И.Г. Описание средней орды киргиз-кайсаков. Алматы, 1998 (初版 СПб., 1785). С. 50. 同様の記述は、カザフ研究で知られるロシア人学者の А.И. リョフシンが 1832 年に著した『キルギズ・カザクまたはキルギス・カイサクの諸オルダとステップの描写』の中にも見出すことができる。Левшин А.И. Описание киргиз-казачьих, или киргиз-кайсацких, орд и степей. Алматы, 1996 (初版 СПб., 1832). С. 143–144. 19 世紀中期以降には、この言いまわしを簡略化した「ディコカメンヌイェ[山向こうの野蛮な]・キルギズ дикокаменные киргизы」という呼称が定着し、「カラ・キルギズ」という呼称と共に用いられた。

23 Кыргызстан-Россия: история взаимоотношений (XVIII–XIX вв.) сборник документов и материалов. Бишкек, 1998. С. 95.

24 Валиханов Ч.Ч. Записка о киргизах // Собрание сочинений в пяти томах. Т. 2. Алма-Ата, 1985. С. 38, 39.

理統計事典』の中で、「[クルグズは] マナブの名で知られる、族長的部族指導者が統治する。マナブは「白い骨」つまりカイサク [=カザフ] のスルタンのような、貴族に属するものとはみなされない」と記している⁽²⁵⁾。上記の二つの例からは、マナブがカザフ社会の「白い骨」と同等の貴族層とは考えられていなかったことが明らかである。また、このような認識は、筆者が調べた限りにおいては、1870 年代初頭までロシア人たちの間で概ね共有されていたものと考えられる⁽²⁶⁾。

ところが、1867 年以降帝政ロシアの直轄統治が始まったことを契機にロシア人たちがクルグズ社会により深く関わるようになると、マナブに対する彼らの認識には変化が生じた。たとえば、1870 年に、ロシア軍人のЛ. コステンコが著作『中央アジア、および同地方におけるロシアの市民性の扶植』の中で、「山向こうの野蛮なオルダ [=クルグズ] には「白い骨」、すなわちスルタンは存在せず、部族はマナブによって治められた。当初彼らは選出されたが、[後に] 世襲されるようになり、独自の貴族[層] を形成した」と記したことからも窺えるように⁽²⁷⁾、マナブはクルグズ社会の貴族層として位置づけられるようになったのである。

このような認識の画期をなすのは、初代トクマク郡長ザグリャジスキーの記述である。ザグリャジスキー以前にもクルグズの許を訪れて、その社会に関する記録を残したロシア人は少なからず存在した。しかし、彼はクルグズ社会を一定期間にわたって間近で観察した最初のロシア人であった。ザグリャジスキーは陸軍軍人であると同時に、統治領域内の民族誌の収集と叙述にも従事した典型的な軍人東洋学者であり、在職中から総督府の官報『トルキスタン報知』を中心に論説を発表した。1876 年に、彼が『トルキスタン地方統計資料』において発表した「諸身分およびそれらに授けられた諸権利をめぐるキルギズの法慣習」では、クルグズの社会構造について以下のように指摘されている。

- (1) 概してキルギズ [=カザフとクルグズを含む] は黒い骨と白い骨に分けられる。(2) 白い骨とはスルタンとホジャ、黒い骨は自由民と奴隷からなる。野蛮な黒オルダ черная орда [=クルグズ] にはスルタンやホジャは存在せず、マナブが白い骨を形成する [...]。(10) スルタンとマナブは自身を白い骨とみなす。スルタンはチンギス・ハンに続く、キルギズのハンの子孫を、マナブはタガイの子孫を自認する⁽²⁸⁾。

25 Семенов П. Киргизы // Географическо-статистический словарь Российской империи. Т. 2. СПб., 1865. С. 596.

26 たとえば以下の文献を参照。Гейнс А.К. Дневник 1866 года. Путешествие в Туркестан // Собрание литературных трудов А.К. Гейнса. Т. 1. СПб., 1898. С. 419; Венюков М. Очерки Заилийского и причуйской долины // Путешествия по Русской Азии и записки о них. СПб., 1868. С. 158–159; Маев Н.А. Путеводитель от С.-Петербурга до Ташкента. СПб., 1870. С. 10–11.

27 Костенко Л. Средняя Азия и водворение в ней русской гражданственности. СПб., 1871. С. 47.

28 Загряжский Г. Юридический обычай киргизов о различных родах состояний и о правах, им присвоенных // Материалы для статистики Туркестанского края. Ежегодник. Вып. 4. СПб., 1876. С. 151–152.

ここで注目されるのは、クルグズ諸部族の伝説上の父祖とされるタガイが、マナブと直接的に関連づけられていることである。すでに 1850 年代初頭のロシア側の記述にはタガイに関する言及が散見されるものの⁽²⁹⁾、タガイとマナブの直接的な関連性には一切触れられていなかった。ところが上述のように、1870 年代以降には、マナブが「タガイ裔」という血統上の原理に基づくことが示され、カザフ社会のスルタンに対応するクルグズ独自の「白い骨」、つまり貴族として位置づけられるようになった。これがクルグズ自身の認識をどの程度反映したものなのかは定かではない。しかし、当時のロシア軍人、学者ならびに行政官たちの言説に鑑みて、1870 年代初頭以降に、クルグズ独自の貴族としてのマナブ認識が彼らの間で定着していったことは確かであると思われる⁽³⁰⁾。ただしここで、マナブの貴族としての社会的地位が、ロシアの辺境統治に関与する軍人や官僚によって認知されたものであったとしても、帝国の全体的な法制の下ではマナブはあくまでも「異族人」であり、帝国の身分編成の中枢をなす「貴族」ではなかったことを確認しておきたい⁽³¹⁾。

(2) 仲介者としてのマナブ

前節ではロシア人たちによって、マナブがクルグズの貴族層として認識される過程を示した。マナブを貴族層と位置づける認識は、同時にクルグズ社会におけるマナブとブカラ（平民）との貴賤の別の鮮明化にもつながったと言える。このような側面を捉えて、ソ連時代の研究においては、マナブの「人民の抑圧者」としての側面が過度に強調されてきた。しかし、当時の地方行政当局における統治の実態に着目してみれば、それとは異なった様相が浮かびあがってくる。この点に関して、筆者は前稿において、1860 年代末から 1870 年代末にかけての直轄統治草創期において、ロシア行政当局がマナブを郷長職に積極的に取りこもうとしていたこと、そして征服活動を進めるために、マナブを核として発揮されるクルグズ遊牧民の機動力を利用していたことを明らかにした⁽³²⁾。以下本節では、まず同時期における個々

29 Сведения о дикокаменных киргизах // Записки императорского русского географического общества. Кн. 5. СПб., 1851. С. 140; Валиханов. Записка о киргизах (前注 24 参照). С. 40–41.

30 具体的には、以下の文献が挙げられる。Хорошихин А. Байтук-батыр (рассказ из кара-киргизской жизни, 1867 года) // Туркестанские ведомости. 1872. № 43; Eugene Schuyler, *Turkistan: Notes of a Journey in Russian Turkistan, Khokand, Bukhara, and Kuldja* (London, 1876), p. 139; Проект всеподданейшего отчета ген.-Адъютанта К.П. фон-Кауфмана по гражданскому управлению и устройству в областях Туркестанского генерал-губернаторства. 7 Ноября 1867–25 Марта 1881 г. СПб., 1885. С. 30; Смирнов Е. Сыр-Дарьинская область. Описание по официальным данным. СПб., 1887. С. 55.

31 後述するように、クルグズの有力なマナブであるシャブダン、1883 年にロシア帝国から陸軍中佐を授与された。この任命にあたってペテルブルグで作成された彼の勤務表の出自欄には、「山向こうの野蛮なオルダ [=クルグズ] のマナブ (スルタン、貴族に相当)」と記された。РГИА (Российский государственный исторический архив), ф. 1276, оп. 6, д. 712, л. 11об. ここで、マナブがカザフ社会の貴族であるスルタンと同等視されていることから窺えるように、マナブの貴族としての位置づけはあくまで現地社会に限定されたものにすぎず、帝国の正式な身分としての貴族ではなかった。実際に、シャブダンは 1899 年に世襲貴族身分への編入を求め、皇帝ニコライ 2 世に宛てて請願書の送付を試みたが、失敗に終わっている。ЦГА КР (Центральный государственный архив Кыргызской Республики), ф. 77, оп. 1, д. 1, л. 6об.

32 秋山「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立」(前注 7 参照) 16 頁。

の行政案件の処理に着目してみたい。

以下に示す表 1 は、セミレチエ州庁において扱われた、徴税や徴発をめぐる訴願とその処理の特徴を時系列的に整理したものである。

表 1. 徴税・徴発をめぐる訴願とその概要（1868–1879 年）⁽³³⁾

年代	宛先	告発者	告発対象	事件の概要	マナプへの着目
① 1868	—	—	バイティク	伺候を拒むクルグズへの鞭刑、馬の徴発およびビー法廷の判決の破棄と改変。	△
② 1869	軍務 知事	サルバグシ・エリの クルグズ、カルグル・ アリベク	ソーロンバイ、マナプバイ	国庫から支給された駅通馬維持費の詐取。	×
③ 1870	—	サウルク・コチュロ フ	ソーロンバイ、シャブダン、 バヤケ	家畜その他の強奪。	×
④ 1870	総督	キルギズ、ジャマン サルト	マナプバイ・ジャンタイ	妻、息子、羊 100 頭、馬 3 頭の没収。	×
⑤ 1871	軍務 知事	プムルン・ウルック のブカラたち	コルチ・アドウチン	電信線建設のための木材供 出にともなう謝礼金詐取、 家畜・金の徴発。	×
⑥ 1876	軍務 知事	ベルディベク・ウル クンバイ	シャブダン・ジャンタイお よびそのジギトたち	負債支払のための馬の徴発。	×
⑦ 1879	総督	サルバグシ郷第 4 ア ウル 176 キビトカの 全てのカラ・ブカラ	サルバグシ郷長	徴税、徴発。	×
⑧ 1879	軍務 知事	ケトメン・テベ郷の カラ・ブカラ	ドゥカン・ルスクルベク（同 郷長）	徴税、徴発。	×

表 1 では、主としてマナプが告発対象とされた案件を示した。ただし、上記のマナプの徴税や徴発行為を告発した訴願の処理において、「マナプによる人民の抑圧」という認識の枠組みはほぼ認められない。もちろん皆無ではない。唯一それが認められるのは、ソルト族のマナプ、バイティクへの対応をめぐるザグリャジスキーの説明である（①）。彼はセミレチエ州軍務知事（以下、軍務知事と略記）⁽³⁴⁾ に対して、「選挙に基づく新しい統治の精神を習得することで、同郷のキルギズ [=クルグズ] は旧来の、恐怖による無制限の影響力から幾分解放されました。それゆえ彼らは思い切って抑圧を訴えたのです」とした上で、バイティクの専制的なふるまいを「部族の中でマナプとしての地位 родовое манапство にあった時分に覚えた」ものと述べた⁽³⁵⁾。

さらにアラビア文字チュルク語表記の訴願原文を見てみると、ブカラ、カラ・ブカラ（平民）⁽³⁶⁾

33 ЦГА РК (Центральный государственный архив Республики Казахстан), ф. 44, оп. 1, д. 30244, 30593, 31786, 31882, 31891, 31913, 33040.

34 本稿が取り扱う範囲では、軍務知事はセミレチエ州に限られている。したがって、以下本文で軍務知事と記す場合は、すべてセミレチエ州軍務知事を指す。

35 秋山「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立」（前注 7 参照）16 頁。

36 文書や文献によってブカラ、ブハラ、フカラ、カラ・ブハラなどのばらつきがあるが、いずれも平民を意味する。

を差出人とする案件が数例認められる（⑤、⑦、⑧）。訴願文面上、告訴相手のマナプとしての出自が言及されることはなく、他方で（カラ）ブカラという言葉に被抑圧者という含意はない。このような傾向は訴願を受け取ったロシア行政当局の対応にも認められる。すなわち、訴願原文中の（カラ）ブカラはロシア語で「人民」あるいは「キルギズ」と訳されており、被搾取者としての側面が強調されることはなかった。このように、この当時ロシア行政当局はクルグズの案件を処理する際、マナプと人民という対立関係を殊更に意識することはなかったのである。

以上のことから、1860年代末から1870年代末にかけては、ロシア行政当局がマナプの貴族階層としての認知を口実にして、その全面的な排除を企図するようなことはなかったと言える。このことに少なからず影響を及ぼしていたと考えられるのは、当時セミレチエ州が置かれた地域事情である。すなわち、「征服から日が浅く、中央アジア諸ハン国の敵対的態度や中国領国境地域におけるムスリム叛乱の成功といった諸事情に鑑み、地域内の秩序の維持と外部攻撃からの防御体制を常時整えておく必要があった」⁽³⁷⁾。この中で、ロシア行政当局はクルグズ社会内部に積極的に介入するよりは、マナプを統治の仲介者としてむしろ有効に活用したものと考えられる。

このことと関連して、帝政ロシア軍人や行政官の中には、選挙制度に基づく郷長職の代わりに、植民地統治の支柱としてマナプの活用をうながす見解もみうけられた。1884年に執筆された「ステップ総督府のための統一規程案のための覚書」は

次のように主張する。「郷長選挙をめぐる派閥抗争は買収をともない、このことが高利貸しを助長し、遊牧民に悪影響を与えている。このような動きを阻止するためには郷を部族や支系の区分に基づいて組織し、その統治をマナプに委任することで、「純粋なかつての秩序」が取り戻せるだろう」と⁽³⁸⁾。

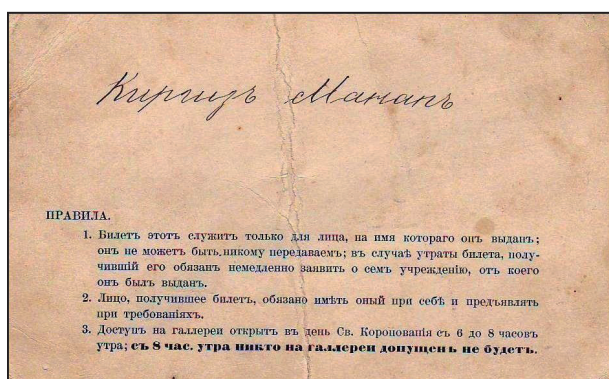


図 1883年アレクサンドル3世戴冠式への招待券（裏面）（個人蔵）

以上のような、マナプを統治の仲介者と位置づけ、積極的に利用しようとする動向は、現地行政当局にとどまるものではなかった可能性を指摘したい。このことを考察する上で着目したいのは、1883年にモスクワで開催された皇帝アレクサンドル3世の戴冠式である。戴冠式への参列者は各地域において選出された。このときトクマク郡ではサルバグシ族のシャブダン、ソルト族のバイティク、サヤク族のチヌィら主要部族のマナプ三名が代表に選ばれた⁽³⁹⁾。上記三名の中で実際に派遣されたのは、コーカンド・ハン国征服戦争において顕著な貢献を果たしたシャブダンであった。出席に先だって、彼には陸軍参謀本部（付き）アジ

37 РГИА, ф. 1291, оп. 82, 1891 г. д. 6, л. 5.

38 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 1217, л. 233–235об.

39 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 31638, л. 53–53об.

ア部長官イワノフから、「キルギズ、マナプ」と明記された招待券が送付された（図⁽⁴⁰⁾ 参照）。そして、戴冠式において、シャブダンには陸軍中佐位 *войсковой старшина* が授与された。当時、1867年4月の政令に基づいて、「市民性 *гражданственность*」の低いアジア系異族人への軍事官位の授与が禁じられていた⁽⁴¹⁾ ことを勘案すれば、これは極めて異例の措置であったと言える。ここで与えられた陸軍中佐という軍位は、軍事上の実際の権限を有するものではなかったが、シャブダンにはそれに見合った年金が生涯保障された。この事例からは、形式上ではあれクルグズ社会の有力者であるマナプを軍事機構に取りこむことで、統合を有利に進めようとするロシア当局の意図が見てとれる。

以上のように、ロシア人たちはクルグズの統合をより確固たるものとする上で、マナプの存在を統合の象徴として重視し、懐柔を試みた。このような傾向がロシア帝国中央にどの程度まで及ぶものであったのかということについては更なる検討が必要であるものの、少なくともクルグズ統治に関わったロシア軍人や官僚たちの間では、1880年代初頭にいたるまで、マナプがクルグズを統治する上での有益な仲介者として認識されていたことは確かであるといえよう。

2. 顕在化する「対マナプ闘争」

前章において筆者は、ロシアの辺境統治に関わる軍人や官僚たちの間で、マナプがクルグズ社会における貴族層として認知され、統治の仲介者として重視されたことを示した。しかし、1880年代以降になると、ロシア人行政官たちの間では、上記のような動向と並行するかたちで、マナプの存在を植民地統治の障害として問題視する認識が徐々に芽生え始めた。このような認識は、1890年代に入ると、マナプに対する「闘争」として意識されるようになり、「対マナプ闘争」とよばれる動向が顕在化した。本章では、1890年代以降に顕在化した、この「闘争」の背景とその内実を検討し、それをとおして当該時期におけるマナプの位置づけを明らかにしたい。

(1) 「対マナプ闘争」の芽生え：タルイジンの「対マナプ闘争」論

まず「対マナプ闘争」の背景を探るにあたって、考察の糸口として着目したいのは、19世紀末にピシュペク郡長を務めた A. タルイジンが 1896年11月15日付で軍務知事イワノフに宛てた報告書である。タルイジンは論文「ピシュペク郡の歴史的概観(1855年–1868年)」⁽⁴²⁾

40 本資料の閲覧に際し、シャブダンの曾孫ジャング・アブドゥルダベク・クズウ氏の御厚情を賜った。ここに記して感謝申しあげたい。

41 Dov Yaroshevski, "Empire and Citizenship," in *Russia's Orient* (前注1 参照), pp. 69–70. 1880年、ナルン部隊長官の X. ナザーロフはナマンガン遠征部隊でのシャブダンの功績に対して、その「マナプとしての出自にふさわしく、将校位を授与するよう」、セミレチエ州軍務知事コルパコフスキーに願ひ出ている。これに対し、軍務知事は同政令を根拠に拒否している。ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 42221, л. 321–322.

42 Талызин А. Пишпекский уезд, исторический очерк (1855–1868 гг.) // Памятная книжка Семиреченской области на 1898 год. Т. 2. Верный, 1898. С. 26–41.

の著者としてよく知られている。他方、タルイジンはマナブを「闘争」の対象として明確に位置づけた最初の行政官であるにもかかわらず、彼が郡長として実際に行ったクルグズ統治に関しては、これまでほとんど検討されてこなかった。以下ではまず、このタルイジンの報告に依拠しながら、1880年代におけるマナブへの対応について整理する。

報告書の中で、タルイジンはクルグズのロシア帝国への併合期から19世紀末にいたるまでの歴代郡長のマナブへの対応を整理した上で、彼自身の統治方針を述べた。タルイジンはまず、ロシア統治草創期について、「初代4名の郡長の下では、マナブに対する訴願などはありえなかった。すべてはマナブをとおして実施された。マナブたちはロシア権力の要請を無条件に遂行し、郡内は完全に平静であった」と述べ、マナブたちがロシア統治の忠実なる仲介者として郡を統べていたことを指摘した⁽⁴³⁾。そして、1880年代初頭に第5代目の郡長を務めた陸軍大佐プーシチンについて、「思い切った方策を講ずることはなかったにせよ、マナブたちの権威を慎重に切り崩しはじめた最初の人物」と評価した⁽⁴⁴⁾。このことに関連して、1884年3月にピシュペクで開催された人民法廷臨時集会在が注目される。人民法廷は、1867年から帝政ロシアの直轄統治の開始を契機として導入された現地民社会の訴訟の調停の場であり、後述するように、クルグズ社会において、それはしばしばマナブたちの権力の温床となっていた⁽⁴⁵⁾。同集会において「貧民の負債を共同体や親族が代わりに支払う」ことを定めた条項が提起されたが、プーシチンはそれを承認しなかった⁽⁴⁶⁾。この措置の詳細については不明な点が多い。しかし、プーシチンの念頭には、マナブたちが同条項を利用して、自らの負債を人民に肩代わりさせるのを防ぐねらいがあった可能性を窺わせる。

次いでタルイジンは、プーシチンの後任の陸軍中佐ナルブートが、「自らの力を顧みずにマナブたちと精力的に闘った結果、彼の下には「マナブを告発する」匿名の手紙が送られた。このため郡内はたいへん動揺した」と指摘している⁽⁴⁷⁾。タルイジンの報告書からは、ナルブートの施策の詳細を窺うことはできない。ただし、当時実際にサルバグシ郷のクルグズたちから提出された以下の訴願をみると、ナルブートが郷長選挙の際の派閥抗争において、訴願の提出を教唆することでマナブの不正行為を取り締まろうとしていたことが明らかである。1888年8月、「サルバグシ郷の全てのカラ・ブカラたち」の名前で軍務知事に宛てて訴願が出された。その中で彼らは、「マナブ、特にジャンタイ一族と郷長による不正と抑圧のために生存の可能性を完全に失いました。[...] 全セミレチエで私たちほど抑圧されている人間は見つからないでしょう」と述べ、郷の分割を要請した⁽⁴⁸⁾。この訴願には、抑圧者たるマ

43 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 9об.

44 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 9об.

45 人民法廷 народный суд は、人民から選挙で選ばれる「人民判事」によって構成された。それは、一名以下の判事で構成される「アウル法廷」、四名以上の判事で構成される「郷法廷」から成り立っていた。さらに、各郷の判事全員が参加する「郷集会」、相異なる郡あるいは郷の住人が参加する、広域にわたる案件を解決するために、軍務知事の命令で指定される「臨時集会」があった。詳しくは、伊藤秀一「中央アジアにおけるロシア人の統治 [II]: パレン伯の勅命査察報告を中心に」『研究紀要』(日本大学文理学部人文科学研究所) 60号、2000年、5-7頁を参照されたい。

46 Материалы по казахскому обычному праву. Алматы, 1996. С. 52.

47 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 9об.-10.

48 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 35769, л. 6.

ナブと被抑圧者としてのブカラという認識の構図が明示されている。また、この訴願に対するロシア行政当局側の対応には、マナブを人民の搾取者として位置づけ、マナブを抑制することで人民の利益を積極的に擁護する姿勢を見てとることができる。軍務知事イワノフはナルブートに対して以下のように指示している。

噂によれば、シャブダン⁴⁹は人民の駱駝で自らの負債を返済しているようだ。マナブであることを利用してシャブダンが完全に人民の負担で生きていることを私は確信するにいたった。[...] マナブのための徴税やそれに類するものは法律で一切禁じられていることをシャブダンに宣告するように。また人民の中でのシャブダンの活動に対する監視を秘密裏に行うように⁽⁴⁹⁾。

ロシア統治草創期においてシャブダンは、ロシアに対して敵対的な他のマナブたちを監視する役割を担っていたことを勘案すれば⁽⁵⁰⁾、今や彼は監視する側から、監視される側へと変わったのである。以上から窺えるように、1880年代末の時点においては、ロシア行政当局はマナブを「闘争」の相手として明確に位置づけることはなかった。しかし、彼らはマナブの人民の抑圧者としての側面に着目し、監視の対象としていたと言える。

さて、以上で述べた1880年代末までの状況を踏まえた上で、タルイジンは自分自身の方針を「体系的な対マナブ闘争 систематическая борьба с манапами」と評した。その方針は以下の二つの点からなりたっていた。第一の方針は、「人民に対して、今やマナブがその他の家系のキルギズと同等であることを説明する」ことである⁽⁵¹⁾。タルイジンの指摘によれば、クルグズ社会の一大勢力であるマナブは、その当時、人民法廷を支配することによって、現地社会で強い影響力を行使していた。そのためタルイジンは、人民法廷に対するロシア行政当局による統制の必要性を訴えたのである。そのことは、報告書の中で、タルイジンが以下のように述べて、人民法廷に対する統制の必要性を軍務知事に強く提言していることから窺える。

…現在マナブの伝統的家柄としての意義はかなりの程度失われつつある。彼らはその優位を維持するために、族長としての権限 право первородства⁵²ではなく、彼らの一族から構成される人民法廷に依拠している。しかし、人民法廷に絶大な権限が与えられ、行政の介入が著しく制限されているため、こういった状況と闘うことは極めて困難である⁽⁵²⁾。

また、第二の方針は、「マナブに対する訴願それぞれについて案件を作成する」ことであった⁽⁵³⁾。つまり、人民を教唆することでマナブに対する訴願を出させ、マナブたちを処罰しようとしたのである。

49 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 35769, л. 35–35об.

50 秋山「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立」（前注7参照）19–20頁。

51 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 10.

52 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 10.

53 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 10.

以上見てきたように、タルイジンはクルグズ社会をマナプと人民の二項対立的なものとして捉え、「人民の利益の保護のため」にマナプを抑制する姿勢を打ち出した。ここで、マナプが糾弾すべき対象として明確に位置づけられたことは特筆に価する。このような認識は他の史料からも確認することができる。たとえば、1897年9月に『ステップ地方新聞』に掲載された「ピシュペク郡からの便り」では、同地域において学校事業や定住化が確実に進展しつつあることが記される一方で、マナプがその妨害者として捉えられ、「私たちの生活における好ましくない現象はマナプ制 *манапство* である。主要なマナプたち——堅い信念を持った狂信者にして、部族区分の擁護者——が生きているかぎり、この悪は消滅しないだろう」と糾弾されている⁽⁵⁴⁾。

それでは、実際の局面において、「対マナプ闘争」はどのように展開されたのであろうか。マナプは人民の敵として排除されたのだろうか。ここでまず、タルイジンの「対マナプ闘争」は彼の思惑どおりには進まなかったことを指摘したい。このことは、彼自身が以下のように述べていることから窺える。

…これまでの5年間の勤務の中で、マナプたちがおこなう徴税に関して、人民の間での噂を裏付けるために証拠集めを試みてきた。しかし、証人が得られたことは一度たりともない。[…] 私が訪ねていっても、人民はみな、「訴願などはない。我々のところはいたってうまくいっている」と答えるばかりなのだ⁽⁵⁵⁾。

報告書には参考資料として、132件の捜査案件の経過とその結末を示す「1894—1896年の3年間に職務上の不正や人民からの徴税のために告発されたピシュペク郡の原住民役職者およびマナプの名簿」も添付されていた⁽⁵⁶⁾。しかし、タルイジン自身が認めるように、多くの捜査が郡庁以下における尋問の過程で証拠不十分とされ、打ち切られる場合がほとんどであり、有罪になったマナプは皆無であった。

さらに、タルイジンがチュイ盆地でおこなった実際のクルグズの統治においては、「対マナプ闘争」の目的として掲げられたマナプの抑制とは異なった側面が見られる。そこで以下の節では、まずタルイジンの統治の実相を検討するとともに、山岳地域における統治にも目を向け、あわせて「対マナプ闘争」の内実を明らかにしたい。

(2) チュイ盆地におけるクルグズ統治の実相

ロシア統治草創期より、クルグズ統治の拠点であるトクマクとピシュペクを擁し、ロシア人移民を多く受け入れてきたチュイ盆地は、ロシア権力が比較的よく浸透した地域であった。このことは、タルイジンの認識にも反映されていた。それは彼が軍務知事へあてた報告書の中で、「チュイ盆地のキルギズにはロシア人の有益な影響——農業労働への穏やかな志向、より平和的かつ合法的手法による係争の解決——を見てとることができる。同地では首領の

54 *Каракиргиз. Корреспонденция из Пишпекского уезда // Dälä viläyatining gäziti*. № 38. 1897.

55 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 12об.–13.

56 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6619, л. 14об.–35об.

手中に権力が集中しておらず、ロシア政府に移行している」と述べていることから明らかである⁽⁵⁷⁾。このような状況下において、タルイジンはマナブを統治の障害として排除するよりも、具体的な施策を推進するためには、それを進める上で有望な人物であれば、たとえそれがマナブであれ提携したのである。

(a) クルグズ定住村落の創設

タルイジンは、学校事業や定住化政策をはじめとする本格的な地域開発に着手した最初のピシュペク郡長であった。まず、定住村落創設の動きを見てみよう。19世紀末にいたるまで、「ジャタク」や「イギンチ」と呼ばれる、零落した遊牧民が個別的にロシア人入植村落に登録される場合があった。しかし、ロシア行政府は一定の集団的な規模でクルグズの定住化をはかることはなかった。ところが、19世紀末、ロシア人移民の増加を背景に郡内の土地整理が課題となる中で、チュイ盆地ではクルグズの定住村落の創設が真剣に検討されるようになった⁽⁵⁸⁾。

この定住化政策に敏感に反応したのが、ソルト族のマナブ、バイティクの一族である。タルイジンは前述の報告において、チュイ盆地におけるマナブ制が崩壊する傾向にあると指摘しているが⁽⁵⁹⁾、バイティク一族はそれを象徴する存在であった。コーカンド・ハン国のピシュペク要塞を攻略する際に大きな功績を挙げたバイティクは、陸軍大尉の軍位を有していた。しかし1886年に彼が没すると、子孫に軍位が継承されることはなく、ジュト（大雪や地表面の凍結などによる家畜の大量死）も作用して実質的に没落傾向にあった。これに代わって頭角を現すようになったのが、一族の遠縁にあたるマナブ、ウズベク・ボシュコイである。ウズベク一族は征服以前からタラス川上流付近を根拠地として軍馬の飼育や商業に携わってきた。1867年のトルキスタン総督府の創設を契機として、一族はシル・ダリヤ州アウリエ・アタ郡に編入されたが⁽⁶⁰⁾、バイティクの死後ピシュペク郡に移住した。以後彼らは亡きバイティクの一族を経済的に支配するとともに、トルカン郷の実権を一族から奪っていった⁽⁶¹⁾。この中でバイティク一族が選択したのは、タルイジンが提唱していた定住化政策を利用することであった⁽⁶²⁾。1896年、郷長選挙に敗北したバイティクの息子アブドゥラフマンは、父親が保有してきた土地である、ピシュペク市南方に位置するクルグズ・アラタウ山脈南麓のアラ・アルチャ溪谷一帯の継承と、同地における定住村落の創設をタルイジンに求めたのである⁽⁶³⁾。

57 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 42221, л. 224об.

58 Образование киргизских оседлых поселений в Семиреченской области // *Dālā vilāyatīning gāzītī*. № 26. 1897.

59 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 42221, л. 13.

60 秋山「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立」（前註7参照）16頁。

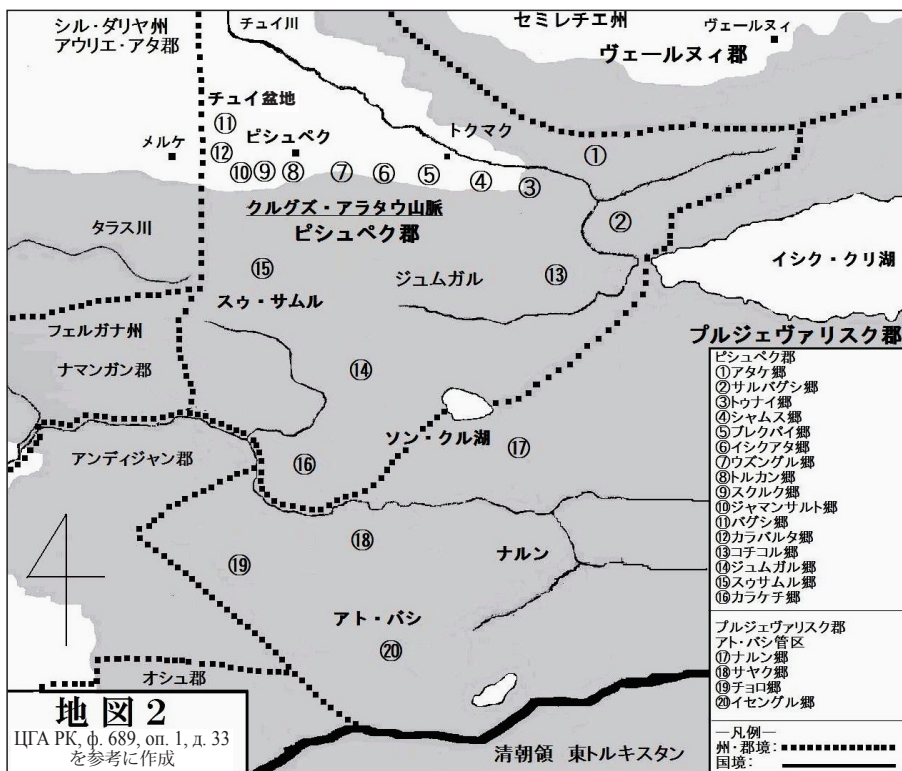
61 1890年、ウズベクは本章第1節で指摘した、1884年の負債条項に基づいて、バイティク一族からの取り立てを郡長に申請している。ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 36062, л. 2-3.

62 ЦГА РУз (Центральный государственный архив Республики Узбекистан), ф. И-1, оп. 17, д. 819, л. 15-16.

63 Терентьев М.А. История завоевания Средней Азии. Т. 3. СПб., 1906. С. 382.

(b) ロシア語・キルギズ語学校の創設

次に学校事業についてみてみよう。1880年代中葉にタシュケントを皮切りに創始されたロシア語・現地語学校は、19世紀末にはカザフ草原やセミレチエにおいてもロシア語・キルギズ語学校として建設が検討されるようになった⁽⁶⁴⁾。1896年3月、タルイジンはピシュペク市で開催されていた人民法廷臨時集会に集ったマナプたちに対し、皇帝ニコライ2世の戴冠式を記念してロシア語・キルギズ語学校の開設を打診した。その中でタルイジンは、クルグズがナマンガンのイシャーン（スーフィー教団の導師）やホジャ（預言者ムハンマドの聖裔）に毎年納めているザカートをやめ、学校建設の費用に回すよう説得した⁽⁶⁵⁾。この後、ソルト族地域に2校、サルバグシ族トゥナイ支系地域に1校、サヤク族地域ならびにサルバグシ族のテミルボロト支系地域に1校ずつ建設することが計画され、最終的にソルト族とトゥナイ支系が暮らすチュイ盆地において建設の合意文が出された⁽⁶⁶⁾。前者においてはチョルパンクル・トゥナリ⁽⁶⁷⁾、後者ではデュル・ソーロンバイ⁽⁶⁸⁾ら有力なマナプを後見人として、



64 トルキスタンにおけるロシア語・現地語学校事業の展開については、帯谷知可「オストロウモフの見たロシア領トルキスタン」『ロシア史研究』76号、2005年、21-22頁を参照。

65 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 22356, л. 1-3об.

66 Корреспонденция из Пишпекского уезда // *Dālā vilāyatīning gāzītī*. № 16. 1896.

67 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 22356, л. 3-3об.

68 Каракиргиз. Открытие школ // *Dālā vilāyatīning gāzītī*. № 20. 1896.

建設費用のための寄付金集めが行われた⁽⁶⁹⁾。ロシア語・キルギズ語学校事業へのマナプたちの関与の実態は不明な点が多く、その解明は今後の課題として残されている。ただし、以上のことから、タルイジンがマナプの集金力を排斥せずに、むしろ自らの政策を推進するための仲介者として活用していたことが窺える。

以上、本節の考察から明らかなように、タルイジンはチュイ盆地においては、マナプ全体を排除するよりは、むしろ彼らを利用して政策を遂行しようとした。他方、山岳地域で展開された統治はまた異なった様相を呈していた。以下ではその詳細を検討しよう。

(3) 山岳地域における「対マナプ闘争」の展開

(a) タルイジンの山岳地域統治

クルグズ・アラタウ山脈以南に広がる山岳地域は、1867年のトルキスタン総督府創設時において、すでにロシア支配に組み込まれていた。しかし、19世紀末の時点において、ロシア人行政官にとって同地域は依然として化外の僻地であり、同地のクルグズに対して強い猜疑心と不信感を抱いていた。1895年、タルイジンは軍務知事に宛てて以下のように報告している。

アウリエ・アタ、ナマンガン、ビシュペクおよびブルジェヴァリスク市によって囲まれる広大な山岳空間は「…」現在にいたるまでロシア的要素が極めて希薄である。同地には野蛮で不穏な、未だにロシアの影響力の外にあるカラ・キルギズ族が暮らしている。「…」山岳地域のキルギズは私刑を己の権利と見なしており、一般の民は山から出ず、己の主人たるマナプの決定に満足しており、ロシア人ならびにロシア権力についての極めて漠然とした理解を持つにすぎない⁽⁷⁰⁾。

実際に、山岳地域の統治は困難を極めた⁽⁷¹⁾。1880年代後半、ジウムガルからスウ・サムルにかけて居住するサヤク族の間ではチョロ支系のマナプ、チョイバクを筆頭とする勢力とそれに対立するマナプとの間で派閥抗争が激化していた。当時郡長を務めていたタルイジンの前任者ナルブートは対応に苦慮した。タルイジンはこの事態を受けて、1892年にマナプ、シャブダンを仲裁役として現地に派遣した⁽⁷²⁾。これを契機として派閥抗争は収束に向かったものの、平静もつかの間、2年後には再燃した。この際タルイジンは、山岳地域へのロシア人入植に打開策を見出そうとした。1895年、彼は州庁に宛てて次のように訴えた。

69 1901年6月、チョルパンクルとデュルは学校事業への協力により叙勲している。ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 1682, л. 108, 113.

70 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 42221, л. 224–224об.

71 1893年、タルイジンは当時セミパラチンスク州で一定の成果をおさめていた郷館 волостной дом の山岳地域諸郷への導入を試みた。これに対して全郷から合意が出されたが、実際に建設されることはなかった。ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 31982, л. 143, 164. なおステップ地方新聞誌上での郷館をめぐる議論については以下の文献を参照。Uyama, “A Strategic Alliance” (前註2参照), p. 248.

72 ЦГА РК, ф. 64, оп. 1, д. 516, л. 20об.

全てのキルギズは平等であるという掟を踏み躪っている山向うのマナブたち *загорные манабы* と根気強く闘うためには […] ジュムガルにロシア人村落を作る必要がある。ロシア人農民は「クルグズの」貧民にパンを与えることでマナブの連盟を直ちに切り崩すことができる⁽⁷³⁾。

このように、ロシア人農民を媒介とした山岳地域の統治が目指された背景には、従来仲裁役を担ってきたチュイ盆地のマナブたちへの不信感も少なからず作用していたと考えられる。1898年にステップ地方新聞に掲載されたエル・サヤク氏なる人物による「ピシュペク郡からの便り」は、山岳地域のマナブたちの非道暴虐を告発しつつ、以下のように訴える。「マナブたちが誰かを強奪すると、彼らは被害者がお上に訴えないようにジギト [=マナブに仕える側近] たちで峡谷を固める。仮に己の侮辱を訴える命知らずがいたとしても、チュイ盆地においてシャブアノフ [=シャブダン一族のことか]、ソクル・モルタイ、チョルパンクル一族のマナブたちから虚偽の証人がみいだされよう」。そして最後に、「現地民行政へのマナブの就任を禁止する代わりにロシア語能力を有するフカラを任命し、不穏な郷には現地民の生活様式や要求に精通するロシア人を郷長に任命するのが望ましい」と強調した⁽⁷⁴⁾。

しかし、農耕に適さない山岳高地への植民案が検討に付される筈もなく、ロシア人人口比率の増加によるロシア化とそれによるマナブ制の解体のシナリオは頓挫を余儀なくされた。このようなロシア化の失敗と統治の仲介者の欠如を急激に埋め合わせるかのように講じられたのが、マナブの流刑であった。たとえば、1896年にピシュペク郡スウ・サムル郷のマナブ、チョイベクは、セミレチエ州北部のレブシンスク郡に流刑されている。このような流刑は、クルグズ・アラタウ山脈のはるか南方にあり、セミレチエ州の中心から遠く離れた山岳地帯において、より活発に行われた。以下で詳しくみてみよう。

(b) アト・バシ地区の動向

清朝国境付近に位置し、天山山脈最奥部に位置したプルジェヴァリスク郡アト・バシ地区は、地区警察関係者以外にロシア人人口を欠き、ロシア権力の監視が事実上行き届かない状態にあった。このような状況にあった同地区では、より積極的に流刑が行われた。同地区では1896年にサルバグシ族のチョコ・カイドウ（エセンゲル郷）がヴェールヌィ郡のニジニ・イリ郷へ、1902年にはサヤク族のカスムベク・バコタイ（チョロ郷）と同じくチョコ・カイドウがフェルガナ州オシ郡へ流された（チョコは2度にわたって流刑された）。以下において、このような流刑がおこなわれた背景について検討しよう。

同地区において、マナブへの明確な対決姿勢が打ちだされたのは1895年である。前述のように、同地区は当時ロシア権力の浸透の度合いが極めて低い状態にあったため、同地区警察署長 И. リハーノフにとってマナブの存在感は絶大なものとして映っていた。そのため同年12月に、彼は軍務知事に宛てて次のように報告し、ロシア統治の障害となるマナブとの「闘争」を訴えたのである。

73 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 42221, л. 13.

74 Yer Sāyāq, Pishpik ūyāzinān kīlgān haṭ // *Dālā vilāyatīning gāzītī*. № 19. 1898.

あらゆる混乱と野放図、そしてすべての悪はチョコ・カイドウら [...] 他多数のマナプたちがいるために生じている。[...] これらマナプたちから郡政府の代表者たちはどこかに逃げてしまった。さらにこれらのマナプたちのために、職務のために郷に滞在する官吏は傷めつけられた。マナプたちの専横は限度を知らない。彼らは以前より会得された習慣によってあらゆる業務に入り込み、法律やお上の要求ではなく、自分の思い通りに事を運ぼうとしている。ナルンに着任した際に私は全てのマナプに対し、静かに暮らし、人民の統治に介入しないよう宣告した⁽⁷⁵⁾。

ところが、マナプたちの存在感や傍若無人さは、植民地統治制度の巧みな利用に基づいていたため、その排除は容易ではなかった。1902 年、同地区警察署長は次のように述べている。

キルギズに自治と人民法廷を与えている現地の法制度に慣れたマナプたちは堅い結びつき *строгая организация* を成している。それは人民の生活とロシアの間に立ちはだかる障壁である。彼らは、人民法廷と現地民行政を自己の打算的利益に奉仕させることで、事実上人民を征服以前の奴隷さながらの状態に維持し続けている⁽⁷⁶⁾。

以上から窺えるように、マナプたちは、現地民に多くが委ねられた制度の内側に入り込むことでかえって、ロシア当局の意に反する特殊な権益を獲得していた。この結びつき、つまり「障壁」にロシア人行政官が介入することは困難であった。その理由の第一は、ロシア人行政官による人民法廷への干渉は依然として制限されていたこと。第二は、人民判事はすべて郷内の権力を掌握するマナプの影響下にあるため、仮に敵対派閥が人民法廷に訴えても無意味に等しかったこと。第三に、郷長や人民判事といった公職に就かないマナプの個人的な行為を法律で取り締まることは困難であったことである。それゆえ、署長は、状況を改善させるためには、流刑という手段によって「障壁」を根本から排除せねばならないと軍務知事に強く訴えたのである。

これに対して、帝国中央政府は流刑に消極的であった。トルキスタン地方統治規程第 15 項の取り決めにしたがい、流刑には内務省の合意が必要とされていたが⁽⁷⁷⁾、同省は「地元行政権力と一般法秩序の枠内での解決が可能である」として流刑に反対した⁽⁷⁸⁾。しかし、トルキスタン総督イワノフは「それを行うだけの力、人員および資金の欠如」を強く訴えて、同省に流刑を認めさせたのである⁽⁷⁹⁾。

ところが実のところ、流刑にさほどの効果はなかった。1896 年に、横暴と違法な徴税を理由に、イセングル郷からヴェールヌィ郡に流刑されたチョコ・カイドウは、流刑先にいながらにして故郷のイセングル郷長や彼の支持者を通じて人民から合計 700 ルーブリを徴収し

75 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6461, л. 33об.-34об.

76 ЦГА РУз, ф. И-1, оп. 13, д. 587, л. 106.

77 Полное собрание законов Российской империи. 3-е соб. Т. 6. 1886. СПб., 1888. № 3814. С. 321.

78 ЦГА РУз, ф. И-1, оп. 4, д. 659, л. 6.

79 ЦГА РУз, ф. И-1, оп. 4, д. 659, л. 7, 31.

た⁽⁸⁰⁾。1901年に刑期を終えて帰還すると、彼は直ちに「障壁」の再構築に取りかかった。彼は郷長に息子カズィを就け、郷役職を自派閥の人間で固めた。そして人民から再度徴税を行ったのである⁽⁸¹⁾。このように、流刑は実際にはロシア統治の強さではなく、むしろその弱さを露呈する結果となったのである。

以上のように、山岳地域において「対マナブ闘争」が強硬的に進められた背景には、マナブそれ自身にのみ起因するものではなく、クルグズ社会全体への不信感と猜疑心、現地民統治機構への不信感があった⁽⁸²⁾。すなわち、山岳地域においてロシア権力は脆弱であり、マナブが統治の障害として立ちだかっていた。また、マナブを、統治を浸透させる道具として使うこともできなかった。それゆえ、ロシア人行政官たちは流刑という先鋭的な手段に訴えることでマナブを物理的に排除しようとしたのである。

本章の考察をまとめよう。19世紀末、郡長を中心とするロシア人行政官たちは、ロシア統治をクルグズ社会に浸透させようとした。この過程でマナブは人民の敵として位置づけられ、「対マナブ闘争」という強圧的な統治方針が顕在化した。ただし、その実相はロシア権力の浸透の度合いによって地域によって大きな差があった。ロシア統治草創期より統治の拠点が置かれていたチュイ盆地では、ロシア行政官たちは、マナブを積極的に排除するよりは、むしろ政策に賛同する有能なマナブと提携しながら地域開発を進めることに力点を置いた。その一方で、山岳地域は地域開発の対象とはなりえず、もっぱら不信感と猜疑心に基づく監視の対象とされた。さらに監視が行き届かないがゆえに、流刑に代表されるような、マナブに対する粗暴かつ極端な方策が採られた。言い換えれば、同地域における「対マナブ闘争」はロシア統治の統治能力の低さに由来する寛容さと暴力性を先鋭的に示していたと言えるだろう。

以上のことから、タルイジンによって提唱され、各地で展開された「対マナブ闘争」は、実際には人民の保護と、そのためのマナブの排除それ自体を目的とするものではなく、むしろロシア統治の浸透に力点を置いたもので展開された。したがって、その中におけるマナブの位置づけは、糾弾の対象として固定されるものではなく、ロシア統治の障害となるか否かによって、仲介者にも処罰の対象にもなりうる可変的なものであったと結論づけることができる。

80 ЦГА РУз, ф. И-1, оп. 4, д. 659, л. 2. なお、1897年にピシュペク郡アタケ郷のクルグズが軍務知事に提出した訴願によれば、ヴェールヌィ郡に流刑中のチョコを支援するために同郷から現金250ルーブリ、羊60頭および小麦100プード(=約1600キログラム)が徴発された。ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 6835, л. 4.

81 ЦГА РУз, ф. И-1, оп. 4, д. 659, л. 2.

82 1899年の皇帝宛上奏文の中でセミレチエ州軍務知事は、国境に接する山岳地域について次のように述べている。「…ロシア人口比率が10%未満の同地域において、ムスリム住民の外見上の平穏な機運を信頼することはできないので、地元行政府は現地住民のあらゆる活動に対して極めて厳重な監視を行わねばならない。しかし、ステップ統治規程の取り決めによれば、こういった監視は現地民行政官たちの役目となっている。しかし、[現地]住民の中から彼ら自身によって選ばれる彼らは、住民に一定程度従属し、さらにその信念や意図を共有しているのである」。Все-подданные отчеты военного губернатора Семиреченской области за 1899 год. С. 1.

3. 植民政策とマナブ

前章まででは、ロシア統治が進展する過程におけるマナブの位置づけについて探ってきた。この中で筆者は、マナブの位置づけがロシア統治との関係性によって揺れ動く可変的なものであったことを検証した。さて、クルグズ社会で徐々に進展してきたロシア統治の展開において、大きな転機となったのが、20世紀初頭におけるロシア人移民政策の転換である。すでによく知られているように、1905年革命後に成立したストリピン政府は、帝国中央部における農村過剰人口を移民として辺境植民地へ放出することを、政策の大きな柱として掲げていた⁽⁸³⁾。本章は、このような植民政策が進展することによって、クルグズ社会がロシア人たちとその統治に、より直接的に対峙するという新たな局面において、マナブがどのように位置づけられたのかを明らかにしたい。

(1) 移民局のクルグズ社会認識とマナブの位置づけ

1905年、ロシア人入植の推進をはかるために、土地整理農業総局の下部組織としてセミレチエ移民局（以下「移民局」と略記）が設立された。移民局の最大の懸案は、ロシア人移民が入植するための土地を確保することであり、そのためにいかにしてクルグズたちから土地を収用するかということにあった。先行研究が指摘するように、移民局の官吏たちは、クルグズ社会をめぐって独自の認識を有していた⁽⁸⁴⁾。そのことが窺える代表的な資料は、移民局初代主管のO. シュカプスキーが『帝立ロシア地理学協会通報』に発表した論文「キルギズ農民：セミレチエにおける生活から」である⁽⁸⁵⁾。この中でシュカプスキーは、クルグズ社会をロシア社会の地主と農奴の関係になぞらえ、封建領主（マナブ）と人民（ブカラ）の階級闘争の過程として位置づけた⁽⁸⁶⁾。そして、シュカプスキーを筆頭とする移民局の官吏たちは、ブカラをマナブから独立した定住村落に編成することで、「マナブの軛」からの解放が達成されると同時に、封建制半ばの未開な社会を改造することで生じる余剰地にロシア人移民を入植させることが可能になると考えたのである⁽⁸⁷⁾。彼らは、実際に政策を遂行する際にも、「マナブ vs ブカラ」という構図をクルグズ社会に当てはめていった。以下では、

83 西山『ロシア革命と東方辺境地域』（前注16参照）129頁。

84 移民局の官吏には、ナロードニキをはじめとする革命運動の経歴の持ち主が多く、彼らの認識に少なからぬ影響を及ぼしていたという。西山『ロシア革命と東方辺境地域』（前注16参照）105頁；*Хабижанова Г.Б., Валиханов Э.Ж., Кривков А.Л. Русская демократическая интеллигенция в Казахстане (вторая половина XIX – начало XX в.). М., 2003.*

85 *Шкапский О.* Киргизы-крестьяне (из жизни Семиречья) // Известия императорского Русского географического общества. Т. 41. СПб., 1905. С. 765–778.

86 マナブを封建領主に比定する見方は、移民局官吏の枠を超え、総督府の官吏の著作やタタール語雑誌に掲載された論文にもみいだすことができる。*Федоров Д.* Военно-статистическое описание Туркестанского военного округа. Чжунгарьско-Семиреченский приграничный район. Ч. 1. Ташкент, 1910. С. 83; Sh. V., “Qirgizlar iŭgrūsında” (前注9参照), p. 102.

87 *Воронков В.* По вопросу о поземельном устройстве туземного киргизского населения в Семиреченской области. Верный, 1908; *Васильев В.* Семиреченская область как колония и роль в ней Чуйской долины. Петроград, 1915.

移民局がこのような構図を強調した背景を明らかにするためのひとつの事例として、セミレチエ州においてはじめて設立されたクルグズ定住村落である、ピシュペク郡スクルク郷を中心にあげてみたい。

スクルク郷には従来、ソルト族のマナプ、チョルパンクルとジャンタイ・ケネサリンが率いる二つの派閥が存在した。1906年に同郷で郷長選挙が開催され、チョルパンクルの息子、スエルクルがマナプ、ジャンタイ・ケネサリンに勝利した。これを機に、シュカプスキーの後任として移民局主管となったヴェレツキーは、敗北したケネサリンに定住化をもちかけ、政策遂行のための仲介者とした。セミレチエ州の中でも、チュイ盆地は植民問題の解決上「最も困難な地域」と評されたが⁽⁸⁸⁾、中でもスクルク郷付近は不法移民が集中し、早急な土地収用が不可欠であった。そのためにヴェレツキーは、派閥抗争を背景とするマナプの動員力を利用して、クルグズを集団規模で定住化させようとしたのである。その際、ヴェレツキーをはじめとする移民局は、定住化政策に協力したケネサリンの一派を「ブカラ」として位置づけた。その一方で、ケネサリンと対立していたチョルパンクルを、シャブダンとともに糾弾の対象とした。前章(2) - (b) で明らかにしたように、学校事業の推進においては、チョルパンクルはロシア行政府の有力な仲介者とみなされていた。しかし、チョルパンクルは、移民局による土地収用を警戒しており⁽⁸⁹⁾、定住化政策には協力しなかった。そのことは、移民局の官吏の報告の中で、「マナプ、とりわけすべてのキルギズの運命を握るサルバグシ族のシャブダンとソルト族のチョルパンクルは定住移行にまったく共感しておらず、あらゆる手段を用いてそれを弾圧している」と指摘されていることから窺える⁽⁹⁰⁾。そのため移民局の官吏たちは、チョルパンクルを糾弾すべき対象として位置づけたのである。

このように、移民局の官吏たちは、ブカラのマナプからの解放という理念を掲げる一方で、自分たちの政策に協力する者たちを、たとえ彼らがマナプであっても「ブカラ」と位置づけ、その妨害者を「マナプ」と位置づけ、排除しようとした。ここからは、移民局の官吏たちが、「マナプ vs ブカラ」という対立構図を、自らの政策を有利に進めるために利用していたことが窺える。

(2) 州行政府以下、地方行政府の対応

前節では、1905年に設立された移民局の官吏たちがその政策とのかかわりにおいてマナプをどのように位置づけたのかということを明らかにした。ところが、セミレチエ州のロシア行政府は、移民局とはまた異なった認識を有していた。西山克典が指摘するように、行政府と移民局は対立関係にあった。その背景には、移民局は移民入植と土地収用に積極的であったこと、対する州行政府は慎重であったという事情がある⁽⁹¹⁾。以下、本節では、前節で述べた、

88 *Велецкий С.* Русское дело в Туркестане // Семиреченские областные ведомости. № 72. 1911.

89 当時スクルク郷の経営調査を実施した移民局官吏ソコロフに対して、現地に暮らすロシア人農民は、「嘗てキルギズは土地を自由に貸してくれて、仲良く暮らしていた。しかしチョルパンクルが権力を握って以降、彼は土地の賃貸しを厳しく禁じた」と証言している。*Соколов А.* О каракиргизах // Семиреченские областные ведомости. № 58. 1910.

90 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 25996, л. 102об.

91 西山『ロシア革命と東方辺境地域』（前注16参照）130頁。

チョルパンクルとケネサリンの派閥抗争を手がかりとして、州庁以下、ロシア行政府のマナプへの対応を明らかにしたい。

この抗争をめぐる州行政府の態度を知る上で興味深いのは、1907年5月に、トルキスタン総督補佐コンドラトヴィチを議長としてヴェールヌイで開催された関係者会合である。会合では、前述のスクルク郷における定住化の問題も重要な議題として取りあげられた。移民局主管ヴェレツキーらは、定住化の動きを「マナプからの解放」と位置づけて、その歴史的意義と植民問題を解決する上での重要性を強調した。これに対して、軍務知事イオノフを筆頭とする州行政府は、それがマナプ間の派閥抗争を背景とする「負債からの解放」を求めた動きであるという見解を示した⁽⁹²⁾。実際、同年末に開催された州庁総務部会は定住村落の創設を認めなかった⁽⁹³⁾。このように、州行政府は定住化の動きに対して非常に消極的であった。

州行政府の消極的姿勢に後押しされるかたちで、移民局に冷遇されていたチョルパンクルたちはケネサリンたちの動きの阻止に乗りだした。そのために活用されたのが人民法廷である。ケネサリンがトルキスタン総督に宛てた訴願によれば、当時スクルク郷の人民判事全員がチョルパンクルの派閥から選出されていた⁽⁹⁴⁾。彼らはケネサリン派の人物を様々な理由で人民法廷にかけ⁽⁹⁵⁾、1907年12月には定住移行を断念させた⁽⁹⁶⁾。この事態を受けて、トルキスタン総督グロヂェコフは「定住移行請願者を抑圧から保護する」よう州行政府に指示した。しかし、州行政府は具体的な対応策を講じることなく、地区警察署長に一切の対応を丸投げしたのである。

それでは、州行政府から事態の收拾を命じられた地区警察署長はどのように対応したのであろうか。スクルク郷を管轄するペロヴォツキー地区の警察署長フォヴィツキーは、定住化を妨害するチョルパンクルらを取り締まろうとしないばかりか、逆に、ケネサリン派の処罰を画策した。1907年7月、トルキスタン総督に宛てた訴願の中で、ケネサリン派のマナプ、ウムトアリーは、フォヴィツキーの動向について次のように述べる。

フォヴィツキーは定住移行の反対者たるマナプたちによって握られています。[...] 彼はチョルパンクルを含む地区内のマナプたちから借金しています。彼は閣下の指示を行わないばかりか、再三にわたって請願の取下げを要求してきました。[...] さらに署長は定住移行を採み消すために、ジャンタイ・ケネサリンの行政流刑を申請するようビシュベク郡長に要請しました。実際、[フォヴィツキーは] 最近私たちに対して、定住移行を断念しなければ、ケネサリンだけでなく私もカパル郡に行政流刑すると宣告したのです⁽⁹⁷⁾。

92 ЦГА РК, ф. 19, оп. 1, д. 56, л. 166об.-167об.

93 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 10801, л. 103.

94 前出の移民局官吏ソコロフもこのことを確認している。Соколов. О кара-киргизах (前注89参照)。

95 このような現象は、同郷に限らず広く観察された。実際にセミレチエのクルグズを間近で観察した Sh. V. 氏は次のように述べている。「ビー [=判事] たちはマナプの近親者や、民の中の支援者から選出される。マナプたちは大抵自分たちに反抗するクルグズを、ありもしない口実でビーたちに協議 [交渉] させて数頭の家畜を奪う。この際、事は合法的に行われる」。Sh. V., “Qirgizlar tūgrūsinda” (前注9参照), p. 102.

96 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 25996, л. 257-257об.

97 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 9475, л. 27-27об.

翌 1908 年 11 月、チョルパンクルの息子で郷長のマナプ、スエルクルはケネサリンの追放を郷集会で決議した。この際、地区警察署長ばかりか、ピシュペク郡長までもがそれを強く支持した⁽⁹⁸⁾。以上のように、地方行政府の中には、地区内の有力なマナプを「障壁」とみなして抑制するのではなく、個々の利害によって協力者として結託する者もいたことが注目される。

このような動向は、スクルク郷を統括するペロヴォツキー地区以外でも存在していたことが窺える。たとえば、トクマク地区警察署での勤務経験を持つ D. ウラエフスキーは、「シャブダン一族との良好な関係の維持は、トクマク地区警察署長クトウコフおよびその前任者たちの政策であった。なぜなら、シャブダン一族は地区を統治する際の負担を著しく緩和してくれたからだ。[...] 地区内で起こる様々な問題を、マナプからの援助なしで地区警察署長が解決することは不可能だった」と述べ⁽⁹⁹⁾、同地区の警察署長たちが有力なマナプと密接な関係を築いていたことを指摘している。

このことと関連して、山岳地域を統括するアト・バシ地区警察署長官の動向に注目したい。同地域では、前章(3)－(b)で検証したように、マナプの流刑が積極的行われた地区である。移民局はチュイ盆地での土地不足を背景に、余剰地の獲得を目指して同地域に積極的に進出していた。こうした移民局の進出をうけて、1911 年 8 月、定住化を希望するアト・バシ地区のサヤク郷のクルグズが、移民局官吏マズレンコに宛てて、徴税をはじめとする「マナプからの抑圧」を訴えた⁽¹⁰⁰⁾。この訴えを受けて、セミレチエ州庁はアト・バシ地区警察署長に「定住移行請願者たちをマナプの横暴から保護するための処置を早急に講じるよう」指示した⁽¹⁰¹⁾。ところが、署長は、「マナプによる人民からの徴税は伝統によって守られてきた慣習法であり、マナプが公職についていない限りロシア法廷の管轄にはならない。人民にとって破滅的なこの慣習との闘争は、行政、つまり人民法廷の中で行われねばならない」と応じた⁽¹⁰²⁾。ここからも明らかなように、署長はマナプの徴税に否定的な評価を下しつつも、それを積極的に取り締まろうとはしなかった。続けて署長は、「訴願がマズレンコの教唆の下、その書記によって執筆された」ことを指摘し、「移民局官吏が行政に介入しない」ことを強く求めた⁽¹⁰³⁾。このことから、署長の批判の対象がマナプではなく、むしろ移民局の官吏であったことが窺われる。

署長のこのような姿勢の背景には、この地域における「警察力の欠如」という状況があり、秩序を維持するためにはマナプの協力が不可欠と考えられていたものと推測されるが、いずれにしても、州行政府以下、地方行政府は時にはマナプの行動を黙認し、時には支援した。それは植民政策を推進するために、マナプを抑制の対象としてきた移民局とは対照をなすものであった。

98 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 10801, л. 2, 42.

99 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 20951, л. 17. 詳しくは次の文献を参照。秋山「20 世紀初頭のクルグズ部族首領権力に関する一考察」(前注 10 参照) 87–88 頁。

100 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 21155, л. 4–5.

101 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 21155, л. 6–6об.

102 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 21155, л. 6об.

103 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 21155, л. 2об.–3об.

(3) マナブの権威の利用と懐柔

さて、1909年に帝国中央の決定によって、セミレチエ州では、ロシア人移民に対して正式に門戸が開かれた⁽¹⁰⁴⁾。これと並行して、帝国中枢の大臣評議会では、遊牧民の定住化の規定を含む、余剰地を獲得するための規則が制定された⁽¹⁰⁵⁾。翌1910年1月に、スクルク郷の分割が正式に承認され、東スクルク郷が成立した背景には、このような中央における方針の急展開によって、セミレチエ州において植民問題の推進が焦眉の課題となったことがある⁽¹⁰⁶⁾。

このような状況下において、植民政策の推進に不可欠とみなされていたマナブがいたことは注目に値する。その代表例が前述のシャブダンである。シャブダンは当時なお、クルグズ社会において一定の影響力を有していた。そのため、ロシアが土地収用を本格的に実施する上で、シャブダンの存在を無視することはできなかった。とくにトルキスタン総督サムソフは、シャブダンの存在感を重視し、その懐柔をはかった。そのことが窺えるのは、土地の分与を要求したシャブダンへの対応である。シャブダンは1882年に制定されたセミレチエ・コサック軍団への土地分与規定をもちだして、1903年にトルキスタン総督に対して、彼が有する陸軍中佐位に見合った400デシャチナ（約400ヘクタール）の特別分与を要求した。この問題はセミレチエにおける植民問題の一部として、関係者によって対応が協議された。その際、総督補や軍務知事らは分与に賛成したが、移民局は、シャブダンを「セミレチエのロシア人入植に対する熱烈な反対者」として位置づけて反対した⁽¹⁰⁷⁾。サムソフは、植民政策の円滑な進展のためにシャブダンの懐柔は不可欠との判断から、特別分与を強く主張した。話し合いは分与に難色を示す移民局との間で平行線をたどり⁽¹⁰⁸⁾、1910年にはロシア帝国中央の大臣評議会にまで上程された。同年、サムソフはセミレチエの巡察を敢行して、シャブダンと会談した。それを踏まえて、サムソフは同年6月に、中央の土地整理農業総局主管クリヴォシェインに宛てて以下のような書簡を送っている。

信じやすく、しばしば浅薄で呑気な自然の子供たるキルギズは、その原始的生活様式のために、彼らにとって未知の文化的生活の諸条件やそれによって惹き起される新たな要請との直面に際して、とりわけ「マナブ」に支柱と保護を見出すことを余儀なくされている。マナブはキルギズの

104 トルキスタン総督には A.B. サムソフ、セミレチエ州軍務知事には M.A. フオリバウムら、移民入植に積極的な人物が就任した。西山『ロシア革命と東方辺境地域』（前注 16 参照）100、130 頁。

105 正式名称を「ステップ諸州統治規定に基づいて統治される諸州において、キルギズの余剰地を国家ファンドに転換することについての指令」と言った。本指令は、1907 年より土地整理農業総局長官クリヴォシェインの指揮の下に作成され、1909 年 6 月 9 日に大臣評議会で承認された。Особый журнал совета министров. СПб., 25. 11. 1909. С. 6–7.

106 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 10801, л. 107об.–108. スクルク郷の土地整理によって、1 万 3000 デシャチナ（1 デシャチナ＝約 1 ヘクタール）の余剰地が獲得された。ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 12737, л. 22об. 1911 年、チョルパンクルにはスタニスラフ綬大金メダルが、ケネサリンとウムトアリーにはスタニスラフ綬小銀メダルが授与された。ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 3476, л. 68об.; Местные известия // Семиреченские областные ведомости. № 80. 1912.

107 РГИА, ф. 391, оп. 3, д. 925, л. 9об.

108 РГИА, ф. 391, оп. 3, д. 925, л. 5.

族長的生活様式の過去の遺制ではあるが、無知蒙昧なステップのキルギズ大衆の前では優越しており、依然として大きな影響力を持っている。[…] それゆえ、ロシア権力の施策はすべて、他でもないマナプの解釈を経てキルギズの認識に反映されるのであり、セミレチエのキルギズ 80 万人の生活様式に変更を迫る、極めて重要な問題を解決する際には、このことを考慮しなければならない⁽¹⁰⁹⁾。

このようにサムソノフは、まず植民問題の解決におけるマナプの重要性を強調した。続けて総督はシャブダンとの会談の様子を記した後、「シャブダンは、将来的に不可避なキルギズの定住生活への移行から得られる利益を確かに理解していて、そのことを人民に説明している」として、シャブダンが植民政策に理解を示していることを説明し、「セミレチエにおける植民事業の成功」をクリヴォシェインに請合った。1910 年 10 月 24 日、大臣評議会は、このようなサムソノフの「断固たる強い要求」に鑑み、400 デシャチナの特別分与を終身利用という限定付きで承認した⁽¹¹⁰⁾。このように、植民問題が先鋭化する中で、シャブダンは逆にクルグズ社会のロシア帝国への統合の象徴として重視されたのである。

本章の考察をまとめよう。移民局が提唱したクルグズ定住村落の創設は、理念上、「マナプからのブカラの解放」を体現するはずだった。しかし、移民局のねらいは「マナプ vs ブカラ」という構図を利用して土地収用を進めることにあった。そのため移民局の進出は、マナプとブカラの階級対立を鮮明にしたというよりはむしろ、土地収用に直面したマナプたちの間に対立を誘発する結果となった。この中で、移民局は實際上、派閥の首領であるマナプを仲介者として、定住化を推し進めようとした。移民の大量流入と土地収用という状況の中で、ロシア州行政府もマナプを利用していった。現地社会の末端で統治にあたった地区警察は、治安維持という観点から「対マナプ闘争」を実践するよりもむしろ、既存のマナプの権力を維持しようとした。また、トルキスタン総督は、土地収用に対する不満を緩和させるために、クルグズ社会のロシア帝国への統合の象徴であるシャブダンの存在を重視し、懐柔した。このように、1905 年に本格化し、ブカラのマナプからの解放を掲げた植民政策は、実際にはただちにマナプの排除にむかうことはなく、マナプとの駆け引きや協力の中で進展していった。また、その中で、一部のマナプは依然仲介者としての存在意義をもち続けたのである。

ただし、全体の趨勢としては、マナプの仲介者としての意義は薄れる傾向にあった。Sh. V. 氏が 1911 年に『シュエラー』誌に寄せた論説「クルグズたちについて」の中で、「ロシア人たちは当初クルグズの勇者の中の忠実な者たち [=マナプ] に地位を与えた。ある者は郡長補佐となり、ある者は警察署長の補佐となった。[しかし] 彼らをとおしてクルグズの状況がよくわかった、すべての者がその地位から追われた。現在では、教育を受けた、知識人たちでもこの地位を獲得することはできない」と指摘するように⁽¹¹¹⁾、ロシア行政府はマナプを公権力から徐々に排除していった。とくに、最も有力であったシャブダンが 1912 年に没した後、その傾向は顕著になった。総督は彼の息子たちに対して、陸軍中佐位と特別分与地

109 РГИА, ф. 391, оп. 3, д. 925, л. 17–17об.

110 Особый журнал совета министров. СПб., 28. 9. 1910. С. 1–2.

111 Sh. V., “Qirgizlar tūgrūsinda” (前注 9 参照), p. 104.

の世襲を一切認めず、それらを直ちに回収した⁽¹¹²⁾。さらに総督は、前述の学校事業に協力したデュル・ソーロンバイを、彼が土地収用の停止を求めてペテルブルグの土地整理農業総局に直訴を試みたという理由で⁽¹¹³⁾「ロシアの敵」と呼んで糾弾したのであった⁽¹¹⁴⁾。ここにいたって、マナブは帝国の仲介者としての地位を追われ、それがもはや「過去の遺制」であるという認識も移民局の枠を超えて、広く共有されるようになったのである⁽¹¹⁵⁾。

おわりに

本稿は、ロシア帝国の統治がクルグズ遊牧社会の深部にまで浸透する過程における部族指導者マナブの位置づけを、現地で統治に携わったロシア軍人や行政官の統治の実相に着目しつつ明らかにする試みであった。最後に、これまでの考察をまとめて、今後の課題を示すことで本稿の結びとしたい。

帝政ロシアの直轄統治の進展とともに、現地で勤務するロシア軍人や行政官の認識などを媒介にして、マナブはカザフ社会のスルタンに類するクルグズ独自の貴族層として社会的に認知されていった。このことを踏まえれば、ロシア統治をとおしてマナブが「確固とした一枚岩になった」する、本論文冒頭で引用したガヴリロフの指摘は正鵠を得たものであったと言えよう。しかしマナブは、17世紀から18世紀にかけてロシア正教に改宗しロシア化を遂げたタタール人⁽¹¹⁶⁾やコーカサス諸民族のエリート層などとは違い、帝国の身分編成の中樞をなす「貴族」として帝国に取り込まれることはなかった。このためにマナブは、支配層としての不安定さを抱えた存在であったと言える。さらにマナブ層の内実も決して一枚岩ではなく、派閥抗争に代表されるような、マナブ間の権力闘争が絶えなかった。

この不安定さゆえに、ロシア統治におけるマナブの位置づけは可変的なものであり、操作の対象とされた。1860年代後半以降、直轄統治の開始を契機として、すでにマナブは公権力としては承認されなくなっていたが、とくに1890年代以降、クルグズ社会末端への統治の拡大を志向する中で、ロシア人行政官たちは人民の利益の保護をうたい、マナブを抑制しようとする「対マナブ闘争」の方針を明確に打ちだすようになった。部分的にはあれ、実際、マナブの流刑が実行に移されたことは注目すべき現象であったと言える。

しかしロシア権力は、マナブの排除を体系的かつ全面的に実行できるほど強力ではなかった。むしろ、ロシア権力の弱さと統治の実効性の欠如を補う上でマナブは有望な存在であっ

112 この経緯の詳細に関しては以下を参照。秋山「20世紀初頭のクルグズ部族首領権力に関する一考察」(前注10参照)97-98頁。

113 ЦГА РУз, ф. И-1, оп. 31, д. 773, л. 9об.

114 ЦГА РК, ф. 44, оп. 1, д. 20951, л. 1.

115 特別分与地の収用に中心的な役割を果たした移民局官吏ワシリエフは、1915年に発表した『植民地としてのセミレチエ州とそこにおけるチュイ盆地の役割』の中で、「現在、マナブ制度は歴史的研究の対象にすぎない。マナブの子孫たちは、この称号を残し、キルギズ民衆によって「トレ(支配者、貴族)」と見なされているが、法的な関係においてキルギズ民衆とは変わるところがない」と述べている。Васильев. Семиреченская область как колония (前注87参照). С. 245.

116 濱本真実『「聖なるロシア」のイスラーム：17-18世紀タタール人の正教改宗』東京大学出版会、2009年を参照。

た。本稿の考察から明らかなように、約半世紀にわたる統治の中で、ロシア当局はクルグズ社会を自ら直接的に把握するよりは、マナブを仲介者として積極的に利用することでそれを統治したのである。マナブは、具体的な政策を遂行する際の仲介者として位置づけられると同時に、征服戦争で活躍したシャブダンに見られるように、クルグズ社会のロシア帝国への統合の象徴として位置づけられる者もあった。1905年以降に本格化したロシア人入植政策に際して実施された遊牧民定住化策は、様々なレベルでのマナブの操作なくしてはありえなかったものであり、マナブを克服しようとすればするほど、ますますそれに依存しなければならなかった。総じてマナブとは、クルグズの伝統的支配者層というよりは、ロシア統治の歪みを象徴する存在であったと言えるのである。

それでは、このような不安定さに直面したマナブたちは、「生き残る」ためにいかなる方策を講じたのだろうか。その問題は、1916年叛乱からソ連政権の成立過程に至るその後の歴史展開との兼ねあいを含め、別稿をたてて論じることとしたい。

【付記】本稿は平成22年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

A Study on the Evolution of Russian Imperial Rule over the Kyrgyz Nomads: Clues from Transformations in the Position of *Manaps* as Collaborators in Russian Rule

AKIYAMA Tetsu

In this paper, I discuss the position of the local elite under the rule of the Russian Empire over the Kyrgyz nomads by investigating how the Russian colonial military rulers and administrators positioned the tribal chieftains of the Kyrgyz nomads, the *manaps*.

The premise on which the modern history of the Kyrgyz has been perceived is the fixed idea that the manaps represented the stratum of “dominant figures of traditional society.” To the present day, the focus of studies on the manaps has been on positioning the manaps as a traditional social system that existed from ancient times. On the other hand, as for Russian rule that lasted for as long as half a century from 1867 to 1917, no comprehensive or diachronic studies based on careful examination of historical records written in those days have been carried out. Accordingly, in this paper, I try to clarify different aspects of the institution of the manaps and how it changed over time under Russian rule, by analyzing documents of the Russian colonial administration kept in the national archives of Kazakhstan, Uzbekistan, Kyrgyzstan, and Russia.

From the eighteenth century, the Russian Empire had recognized the Kyrgyz nomads on the basis of an understanding of the Kazakh nomads. In the process of expansion into the Kazakh Steppe after the collapse of the Jungarian Empire, the Russian Empire recognized the Kyrgyz nomads as an ethnic group living on the periphery of the Kazakh Steppe, which was reflected not only in its name (*Dikokamennyi Kirgiz*), but also in the representation of its social structure. Focusing on the fact that the Kyrgyz nomads lacked the aristocratic (*aq suék* “white bone”) element of the Kazakh nomads as descendants of Chinghiz Khan including sultans, the Russian military rulers and scholars regarded the manaps as non-aristocrats distinct from sultans. However, after the establishment of Russian direct rule in 1867, the Russian military rulers and colonial administrators gradually began to recognize the manaps as aristocracy peculiar to the Kyrgyzs nomads and comparable to the Kazakh sultans. Still, in contrast to the latter with more solid recognition as aristocracy within the Russian Empire, the Kyrgyz manaps remained indistinct throughout the Russian administration until the beginning of the twentieth century. Indeed, there were no manaps officially raised to the peerage.

From the end of the 1860s to the end of the 1870s, Russian military rulers and colonial administrators neither perceived the manaps as an issue to be dealt with nor did they plan the elimination of their stratum in the administration. Even after the 1880s, when the Russian Empire completed the conquest of Central Asia, Russian military officials and colonial administrators still considered the manaps to be influential collaborators in Russian rule over the Kyrgyz nomads. However, after the 1880s, as the colonial administration put more stress on protecting the benefits of the common people, it increasingly saw the manaps as the obstacle to Russian rule. At the end of the nineteenth century, in striving to govern the Kyrgyz more directly and further expand its power, the Russian colonial administration turned to a more heavy-handed policy in the name of the “fight against the manaps (*bor 'ba*

s manapami).” However, in the course of this struggle, it became clear that the power of the Russian Empire did not extend to the roots of Kyrgyz society, and the Russian authorities failed to gain cooperation from the local population. Facing this situation, particularly in the Chui Valley, the Russian colonial administration chose to collaborate with the manaps deemed useful in ruling the local society, rather than to liquidate them as the entire class. The Russian officials continued to implement such concrete political measures as building native Russian and Kyrgyz schools in close cooperation with the manaps. In contrast to the Chui Valley, in the mountainous lands to the south of the Kyrgyz Alatau (*Zagornyi Krai*), the fight against the manaps assumed a harsher form. In this region, the Russian colonial administration banished the manaps and sent them into exile for a certain period of time. On the one hand, this measure acutely indicates the eagerness of the Russian colonial administration to directly oppose the manaps and physically eliminate them. However, on the other hand, what drove the Russian colonial administration to take these repressive measures did not stem from the manaps themselves, but from the fact that the Russian colonial administrators viewed the local population with distrust and suspicion, namely from the dysfunction of colonial rule. The banishment was evidence of the frailty, rather than the strength, of Russian rule.

Lastly, I deal with the position of the manaps after 1905, when settlement of Russians and expropriation of lands were becoming matters of great urgency. The Land Resettlement Agency established in Semirech’e Oblast in 1905 became a new standard-bearer in the fight against the manaps. Its activities were based on a strong belief that establishing villages for permanent settlement would not only promote the liberation of the populace from the yoke of the manaps and facilitate the development of the backward half-feudal Kyrgyz society, it would also motivate more Russian peasant immigrants to settle there. The advancement of the Land Resettlement Agency caused a serious conflict between the manaps trying to take advantage of the resettlement policy to gain more power and land, and the manaps realizing that the real intention of the resettlement policy was confiscation of their lands. Under these circumstances, the implementation of the resettlement policy was accompanied by factional strife among the influential manaps rather than by the class struggle between the manaps and the common people. The Russian officials of the local administration were reluctant to promote the resettlement policy and were even trying to deter it. The manaps opposing the resettlement policy hampered movements led by those manaps in favor of this policy with recourse to the people’s court (*narodnyi sud*). The oblast administration took no specific measures to cope with the strife and left its solution to the county heads and the district superintendents (*uchastkovyi pristav*). The district superintendents in their turn did not challenge the manaps’ authority so much as amplified the influence of the manaps in the districts as a bulwark against the intervention of the Land Resettlement Agency. After 1909, when the central government took a sudden turn in the resettlement policy by opening the door to Russian peasant immigrants in Semirech’e, the Russian colonial administration managed to reach an agreement with influential manaps in various ways. While regarding the institution of the manaps as a remnant of the past, the governor general of Turkistan A.V. Samsonov attached substantial importance to them as collaborators. He treated Shabdan with special care as a symbol of the Kyrgyz nomads’ integration into the Russian Empire. He even granted land to Shabdan in order to win his trust.

In the course of time, the manaps gradually lost their power. However, under Russian imperial rule, they managed to maintain their power by standing on the boundary between the Russian authorities and the Kyrgyz people. What made this possible were the frailty and the defects of Russian rule.